

Perspectives in Psychoanalytic Criticism

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/5256

精神分析批評の視点

小 原 文 衛

「応用」 application の問題。フロイトのテキストから抽出された概念・方法が、「文学」という領野で見いだされるようになって以来、常に提起される批判のモデルがある。それはこの「応用」というキー・タームを軸にして展開されるものである。

「応用」。「この語が通常示すのは」、と J・ベルマン＝ノエルは言う。「ある知の領域に属する探究原理、探究方法をこれとは別の分野で用いること、である。前者のことを場合によって〈基本科学〉あるいは〈補助科学〉とも呼ぶ」。¹⁾ 例えば、考古学に放射線科学が用いられる場合、後者は「基本科学」あるいは「補助科学」となり、前者にとって一種の道具であるわけだ。このような図式でものを考えるとすれば、精神分析は文学にとっての補助科学であるということになり、道具ということになるのである。

文学への精神分析の「応用」という場面においては、「隣接科学との間での輸出入をすること」が問題なのではない、とベルマン＝ノエルは言う。精神分析（あるいはフロイト）の無意識の理論が文学をはじめとする諸々の分野においてその有効性を発揮できることを証明するのは次のような洞察であるという。つまり「同一の〈解釈格子〉が、一見非常に異なった複数の人間事象を解読するのに役立つ」。「精神分析を一定の心的事象に応用するということは、素材、状況、機構、制度、文化的所与を通じて、欲望が発現するさまを観察することである」。²⁾

しかし、「応用」を問題化する際には、諸々の人間的事象の根底には欲望があるのだ、と論じてみたところでいっこうに解決はえられない。なぜなら、先に挙げたような批判の根底には応用に伴う還元主義的傾向に対する疑問が存しているからである。つまり、ノエルのような弁護の仕方はかえって精神分析批評に対する批判、すなわち精神分析は全てを欲望、とりわけ性的なものに還元してしまっている、という批判的解釈を助長する結果におちいるのだ。

通常の意味での「応用」と精神分析の文学への「応用」とは異質のもので

あると説いたところで、結局上のような問題は依然として残るわけで、われわれとしては、むしろ「応用」という考え方そのものを検討する必要を感じざるをえない。ここで繰り返し強調しておかなくてはならないことは、「応用」という状況が批判の中心となっているとき、そこには同時に「還元主義」を見て取る傾向がある、ということだ。以下の論考においては、精神分析と文学が対峙した読みのトポスとしてエドガー・アラン・ポオという固有名を選び、ボナパルト・ラカンという道程のなかで精神分析批評の問題点とその特質を明らかにし、今後件の批評がとるべき視点を模索してみたいと思う。

ボナパルト—石化されたフロイト

マリー・ボナパルトによる大著『エドガー・ポオ——精神分析的研究』*Edgar Poe : Étude psychanalytique* (1933) は ジョウゼフ・ウッド・クルーチによる『エドガー・アラン・ポオ——天才に関する一考察』*Edgar Allan Poe : A Study in Genius* (1926) と並んで、ポオの精神分析的研究史上、最前列の位置を占める。ただ、クルーチの研究は本来の意味での「病跡学」^{パトログラフイ}に近い。またその正常対異常というイデオロギー的基盤からして、フロイトのテキストに依拠する精神分析学とはほど遠いものがある。クルーチの見解では、ポオは重症の神経症患者なのであり、健常者とは決然と区別されてしまう。ポオの作品は「いかなる人々の生活とも……まったく関係がなく、しかもいかなる社会的あるいは知的傾向にもとづいてもそれらを説明することは不可能であるし、いかなる時代の精神の表現としてみても、説明することはできない」。³⁾ クルーチにとって、ポオの作品を理解する唯一の道は、伝記的アプローチによる神経症患者ポオの診断を経由する以外にない、ということになる。クルーチの研究はその「伝記的アプローチ」という特質から見ればボナパルトの研究との間に類似点を持つ。しかしクルーチの大前提である正常対異常という素朴かつ危険な二項対立こそは、ショシャーナ・フェルマンが言うように、「まさにフロイトの発見が根底から壊乱し、解体した対立なのだ」。⁴⁾

これに対して、ボナパルトの見解では、ポオの作品は（健常者と想定される）読者にとって、完全に閉ざされてはいない。それは次のような視点による。

……顕在的な物語の奇妙さの背後で演じられる悲劇の深さと現実性を私

たちの無意識が非常によく認識しているからこそ、ポオの書いた各々の物語は、いくら子供っぽく見えることがあっても、私たちの本能をひどく揺さぶるのだ。(強調ボナパルト)⁵⁾

また、彼女の言い方では、「創造的芸術一般において疑いなくそうであるのと同様にポオの作品においては」、

芸術家の目的とは、いわば、自分自身の無意識の情動を読者の無意識に徐々にしみこませること、あるいはもっと正確には、二つの無意識を一つにして振動させることなのである……。⁶⁾

ボナパルトの主張によれば、ポオの物語や詩は人間ポオが過去に経験した外傷的な出来事の結果であり、顕在内容としてのテキストの深層には通常なら巧みに抑圧されているはずの幼見的衝動・願望が隠蔽されている。さらにそのような衝動がわれわれの無意識にも存しているからこそ、ポオのテキストは読者の無意識に影響を与えるのだ。こうした見解は、フロイトが「詩人と空想すること」というテキストのなかで展開した「誘い水」あるいは「前快感」の理論にかなり忠実である、と言える。

「詩人と空想すること」のフロイトによれば、「空想すること」と「詩的活動」(どちらも主体が幼年期に多大な快楽を汲み取ったところの「遊び」の代理形成である)とは、ともに何らかの願望を充足するという意味では近似の関係にある。「空想する」ということに関して言えば、満足している主体はそんなことはしないわけで、「みたされなかった願望こそ空想を生みだす原動力であって、空想というものはどれもこれも願望充足であり、人を満足させてくれない現実の修正を意味しているのである」。⁷⁾ しかし、通常なら他者にとっては嫌悪の対象ともなりうる空想=白日夢的願望充足が、詩作品において顕現したときにのみ、読者の裡に感動効果を呼び起こすのはなぜなのか。その「詩人のもっとも深い秘密」、「本来の作詩術ars poetica」の二つの構成子を、フロイトは次のように推察し、「誘い水」、「前快感」の概念を提出する。

……詩人は利己的な白日夢の性格を修正と隠蔽によって和らげる。それから詩人は、その空想描写によってわれわれに提供している純形式的な、つまり美的な快感によってわれわれを籠絡する。われわれは、それを足場にして心のごく深いところにある源泉からきわめて大きな快感を汲み

とってくることを可能にするところの、われわれに提供されるそのような快感を、誘い水、あるいは前快感と名づける。(強調フロイト)⁸⁾

詩作品から与えられる「誘い水」・「前快感」は、読者の無意識を揺さぶり、読むという行為に快楽を付与し、なんらかの願望充足を引き起こす。アリストテレス的なカタルシスを想起させる、こうしたフロイトの考え方には、一主体の無意識が意識を介さずに別の主体の無意識に影響を与えるという注目すべき事実についての洞察が底流としてある。ボナパルトの挙作では、作者と読者とからなる一種の共同体を想定するフロイトの考え方に忠実に、読者(あるいは解釈者=分析家)の無意識に影響を与えうるものとしての作者(あるいは被分析者)の無意識の解明が企図される。

「詩人と空想すること」に対するボナパルトの忠実さは、「創造行為」を「夢」との比較において捉える点にも明らかである。つまり、フロイトは夢を空想と同質のものと考えており、そこから必然的に詩作品もその等式に含まれるわけだが、ボナパルトはこの洞察に則って、夢において起動されるのと同様な「作業」をポオの作品に見て取るのだ。⁹⁾

ここで、ボナパルトによるポオ・テキストの分析を詳細に紹介することはできないが、例えば、ベレニス、モレラ、リジイア、エレオノーラといったヒロインたちは、夢の作業の一つ「置き換え」の結果であり、ポオの母エリザベス・アーノルドの再現であるとされる。つまりこれら一連の「死中の生にある母」The Live-in-death Mother の物語のヒロインたちは、肺病患者であったポオの母と同じように「病弱で華奢であり」、その原像の諸属性を付与されている。本来は母に向けられていたオイディプス的な情動がこれら「想像的形象」に「転移」されているというのである。また、特にベレニスとエレオノーラとはエリザベス・アーノルドとポオの幼妻ヴァージニアとの諸特徴をもった複合的形象であり、「圧縮」の諸例であるとされる。¹⁰⁾

各物語に繰り返しあらわれるゲシュタルトを鋭く見抜き、そうした反復に分析を加えるボナパルトのやり方は、テキストが織りなすコンテキストを形成し、一面ではそうした読みの正当性を主張している(これは、後に検討するラカンがまさにしていないことで、デリダ¹¹⁾はこの点ではラカンよりもボナパルトを評価している)。しかし、テクスチュアリティという観点からすれば、エリザベス・ライトが批判するように¹²⁾、ボナパルトにとって肝要なのは、テキストの顕在内容ではなく、潜在内容のほうなのだ。ボナパルトの読解では、伝記的事実がつねに意味作用の急停止を引き起こしているのだ。さ

らに言えば、彼女の著作では、まず、ポオの伝記（これはハーヴェイ・アレンによる『イズラフェル』¹³⁾に全面的に依拠していて、Book Iをなす）が置かれていて、作品分析が着手されるのはその後である。ポオの人生(生活史)をたどった後、ボナパルトはこう切り出す。「今や、ポオの物語を考察する準備ができた」。¹⁴⁾ 実は、テキストの潜在内容はBook Iにおいてすでに読み取られているわけで、ポオの言説(テキスト＝夢＝自由連想)は伝記的事実(生活史)に即して解釈されるというだけでなく、むしろ、あらかじめ解釈された意味が、テキストに押しつけられる、あるいは検証される、という印象を与えており、それがボナパルトの挙作のあらましであるといわれても無理がないだろう。この様態からしてすでに還元的であるという批判は免れないのである。

「応用」の問題圏に話を戻してみよう。ボナパルト(の分析)は見出すべきところに見出すべきものを見出して終わる。彼女の言説は行為遂行的に師への忠誠を誓うのであり、その眼目はフロイトの初期本能論を検証し、テキストを通して作者の無意識を解明することにあるのだ。またボナパルトは、「W・イェンゼンの小説『グラディーヴァ』に見られる妄想と夢」(1907)¹⁵⁾のフロイトが自らの解釈の裏付けを生身の作者イェンゼンの承認に求めたのとちょうど同じ論理に動機づけられて、人間ポオの実人生(と目される伝記)の中に超越的シニフィエを探究し、テキストの意味作用の固定を試みる。実はこうしたボナパルトの挙作には「文学(＝被分析者)／精神分析(＝分析家)」そして「作者(＝被分析者)／テキスト(夢・空想・自由連想)／解釈者(＝分析家)」という図式が内在している。これら二つの図式のなかで上演される逆転移的とも呼べる状況を考慮に入れないうえ、ボナパルトは意味の固定という挙作において還元主義的な態度をとらざるを得なかったとも考えられる。

第一の図式に関して言えば、ボナパルトの読解では、精神分析が一方的にテキストに解釈を加えている、なんらかの加工を施している、と指摘できる。これが「応用」という言葉の本来の意味なのであろう。つまり、精神分析そのものへの差し向け、解釈の再帰性が欠如しているのだ。フロイトの初期本能論は安定化され固定化された真理として扱われており、テキストの読解のなかで見出されるべきものとされている。精神分析学(あるいはその他の諸学)の文学への応用において、まさに問題となるのが、この自己再帰性の欠如なのだ。なぜなら、「基本科学」がそのまま見出されるこの瞬間にこそ、分析は還元主義的な局面をあらわにするからである。ここでわれわれは、石

化されたフロイトとでもいふべきものを見出すのである。

次に、第二の図式に関しても、ポオを「神経症者」・「屍体愛好症患者」等々¹⁶⁾と診断するボナパルトの態度は、作者の無意識と読者の無意識との間の相互的關係を認めてはいるにしても、分析家という孤高の格位から症候としてのテキストを読んでいるのであり、自己再帰的な契機の欠如の一形態を顕在化している。こうした態度は、先に挙げたクルーチのそれとさほど隔たりがないわけで、やはり還元主義的な「精神分析的伝記」の一モデルという汚名は免れない。

ただし、自己再帰性、フェルマンのいう「自己批判的潜在能力」¹⁷⁾は、ボナパルトのテキストにもそれなりには内在しているようだ。パメラ・タイトルは、ボナパルトの著作を個人史の投影にすぎないとして、次のように弾劾する。

このマリー・ボナパルトの論文のなかに、読者は容易に、ポオがもつと同様な空想を、さらに「驚くべき物語」をまだ読んでいなかった頃の少女の心の同様の委曲を目撃するかもしれないのだ。というのは両者の伝記に符合する点があるからである。マリー・ボナパルトの母親は、娘の出産の一ヶ月後、咯血により死亡している……し、一方、ポオの母親は、彼が三歳のとき、肺結核で死亡しているのである。ボナパルトとポオは、共通した恐怖と欲望をもっていたのである。

問題なのは彼女が常に自分の個人史を作品の上に投射し、そこに自分自身の反映しか見なかったということである。¹⁸⁾

タイトルの言説はまさにボナパルトの分析がポオのテキストに対しておこなったことの反復である。タイトルがボナパルトの分析について言っているのと同じことを、われわれがタイトルの言説について言うことも可能であるかもしれないのだ。この読者論的逆転移の形をとる反復運動こそが、「自己批判的潜在能力、自己に立ち戻り、批評家から真理についてのあらゆる保証済みの権威的な足場を奪ってしまう（フロイトの諸洞察の）力」¹⁹⁾を顕在化しているのである。タイトルとは対照的に、この局面に関して積極的な意義を認めるエリザベス・ライトもこう述べている。

ボナパルトはポオがアンビヴァレンスの熟練者、そして空想の扇動者で

あることを示してなお、ポオの無意識に全面的な信頼を置くのであるが、逆説的なことに、その一方で彼女の無意識もまた、積極的に関与しているのだ。ボナパルトは自分がテキストの分析家であると信じていたのだが、彼女の患者と同じように、彼女も被分析者だったのである。²⁰⁾

だが、ボナパルトの解釈行為が生み出すこの反復では、テキストそのものの役割が極めて副次的なものとなっている。作者の無意識の解明がそもそもの目的である彼女の研究では、作者と読者という二主体からなる二項関係が突出してしまい、これはテキストがあくまで素材として扱われている²¹⁾ ことの証である。テキストの構造の研究をシニフィエの探究に従属させ、テキストの潜在内容を抽出することで作者の無意識を解明しようとする分析は必然的に固定した二個の主体を想定することになり、自己再帰的な契機を見逃してしまうか、抑圧してしまう。「誘い水」・「前快感」そのものについての考察は研究の埒外に置かれてしまわざるを得ないのである。ここでわれわれが直面しているのは「無気味なもの」の問題圏にある反復であり、それは後に示すように「快感原則」の彼方にある反復でもあるのだ。それは象徴秩序の考察抜きには抑圧するしかない反復だと言える。

少々道をそれるが、問題はまだある。歴史そのものの修辞性、そこからある程度の主観性が明らかになる²²⁾ とすれば、「テキスト＝虚構」／「伝記＝現実」という図式に依拠する読解はかなり不安定な状況に置かれることになる。つまり、伝記的著述にしてからが一筋縄ではいかない代物であるとするれば、ボナパルトの分析とはまさに作者という虚構との格闘であるとも言える。ひょっとすると、われわれがそこに見出すのは客観性の保証ではなく、間テキスト性の問題なのかもしれない。

ラカンと反復の自己再帰

伝記的アプローチという手法が、少なくとも精神分析にとって、意味作用の硬直化を招くように働くということは今や歴然としてきた。ボナパルトの分析ではあらゆるものが自明のこととされており、そうした諸自明性が精神分析から文学テキストへ、という一方向的な流れを生み出すこともまた把握される。そもそもが精神医学の一形式であった精神分析は、自らの諸図式を読解という場に置くとき、時に「診断」の様相を帯びざるを得ないのかもしれないが、問題は、「分析家＝解釈者」／「被分析者＝作者」というヒエラル

キーが「精神分析」／「文学」というもう一つのヒエラルキーを生んでしまうということである。(暗黙に)ボナパルトが前提とした諸帰結(そこには「精神分析」そのものも含まれるかもしれない!)を根底から疑問視すること。ラカンが「文芸批評」ということを念頭において、こう述べている。

私の批評が文芸批評と受け取られてもしかたがないとしても、私の批評は、ポオが^{レツトル}文字についてそうした^{メツサージュ}言表を形成するべき作家として行なっていることにしか係わることはないだろう。私はそのように試みている。もしポオがそのことをそのままのかたちで言わないとしても、それは不十分にではなく、言わないことによってますます厳密にそのことを告白しているのである。

しかしながらこうした言明の省略は彼の^{フシコビオグラフィ}心理学的伝記上のいくつかの特徴によっては解明されることはないだろう。そうした事によっては解明されるよりは閉塞されてしまうことだろう。(であるから、ポオの他のテキストを磨き上げたあの女流精神分析学者はここで家事を放棄すると告げているのである。)……

もし精神分析が文学から、発現状態にある抑圧について、心理的伝記的でない考え方を汲みとるとすれば、精神分析はここでもまた、常にそうであるように、文学から学ぶことになるのは確実である。²³⁾

「あの女流精神分析学者」とはもちろんボナパルトを指すのであるが、ラカンは『エクリ』でも「詩人の魂」を参照しない、言語学的詩学の可能性を云々している²⁴⁾。ボナパルトがテキストの潜在内容を解明しようとしたのとは対照的に、ラカンはテキストという顕在内容になんらかの動きを追おうとする。ただ、ラカンがテキストそのものを問題とするのは、伝記の事実性に関する自然主義的態度を括弧に入れ、現象学的残余としてのテキストの領域を獲得する、といったような現象学的還元の道筋とは別のコンテクストにあることだと思われる。ラカンがシニフィエではなくシニフィアン²⁵⁾の分析に着手するのは、象徴することとは事物の殺害を指し、シニフィエの不在においてこそシニフィアンは力動性を与えられる、という洞察²⁵⁾からであり、その洞察はフロイトのテキストの読解の結果であると同時に、ラカンが読んだポオのテキスト「盗まれた手紙」“The Purloined Letter”が精神分析に与える一帰結でもあるのだ。つまり、フロイトのテキストがラカンの読解になにかを与えると同時にポオのテキストがラカンの読解になにかを与えているので

ある。

「《盗まれた手紙》についてのゼミナール」で、ラカンがポオの件のテクスト²⁶⁾における二つの場面と彼が想定するものに注目する。第一の場面、ラカンのいう「原場面」の構成子は王妃と目される「さる高貴な人」と「もう一人の高貴な人」（この人物は王と目される）、そしてD大臣である。場所は「王宮の私室」“the royal boudoir”。被害者の女性は「問題の文書——率直に言えば手紙」を受け取る。そこに突然、王が入室してくる。「彼女はとりわけその手紙を隠したかった」のだが、引き出しにしまう間もなく、開けたまま宛名を上にして、手紙をテーブルの上に置く。王はその手紙に気が付かなかったわけだが、そこにたまたま入ってきたD大臣は、「山猫のような眼」で手紙を見つけ、宛名の筆跡と受取人の狼狽した様子から事態を察知してしまう。あとは大臣がとんとん拍子にことをすすめるだけである。彼は普段通り急いで事務処理を済ませると、問題の手紙に「少しばかり」似ている手紙を「取り出し」“produces”、それを開けて、読むふりをする。この後、自分の手紙を例の手紙のぴったり横に並べておく。大臣は15分ばかり公務について喋った後、自分のものではないほうの手紙を手にして退出してしまう。王妃はこの大臣のやり口の一部始終を見ているわけであるが、王（「第三者」）がそばにいるためにどうすることもできない(31-2)。次に第二の場面であるが、ここでは警察、D大臣、そしてデュパンが構成子となる。この場面における劇はD大臣の事務室で上演される。D大臣が夜中邸宅を頻繁に留守にするのに乗じて、警察はこの建物全体を一室一室、すみずみまで捜査するが、問題の手紙は発見されない。警察は待ち伏せをかけて大臣を身体検査を行なっているのであるが、そこでもやはり手紙は発見されていないのである。万策つきた警視總監Gは、デュパンに捜査を依頼、ついにデュパンの大臣宅訪問、とあいなるわけである。偶然をよそおって大臣宅を訪問したデュパンは、大臣の話に耳を傾けているふりをしながら、「緑色の眼鏡」の下に隠れた眼で部屋のなかを見回す。そしてついに彼の視線が「ボール紙製の、線状細工を施した安ぴかの名刺差し」の上に止まる。この名刺差しはマントルピースの中央のすぐ下の真鍮製のノブから吊るしてあるもの。そこ（「あらゆる訪問者にまる見えで、ひどく目立つ場所」）に差してある一通の手紙、この手紙こそが問題のものであるとデュパンは見抜いてしまう。さらに名刺差しの手紙が、總監の説明にある件の手紙の特徴に著しくあてはまらないことがますますデュパンの確信を強めるのである。今度はデュパンがとんとん拍子にことをすすめる。彼は大臣に別れを告げ、いったんは邸宅を去る。テーブルの

上に嗅ぎ煙草入れを故意に残して。翌日忘れ物を取りに来たふうをよそおって大臣宅を再度訪れたデュパンは、野外で勃発した銃声騒ぎ（これは彼があらかじめ仕組んでおいたこと）に大臣が気を取られているすきに、名刺差しの手紙を取り、「外見に関するだけの」「模造品」と入れ替え、まんまと問題の手紙を取り返す(49-51)。

ラカンが第二の場面が何らかの形で第一の場面を反復していることに目を付ける。彼が「原場面」という言葉を使うのはこの故である。ただし、この反復はフェルマンが言うように²⁷⁾、同一性の反復ではなく、差異の反復なのだ。ボナパルトは「盗まれた手紙」というテクストに「母親の失われたペニスへの悔恨の思い、それと同時にその喪失への非難」を読み取る。彼女にとって手紙は「母親のペニスの象徴そのもの」であるのだ。手紙は「女性のペニス——もしそれが実在するとしたら！——と同じように、暖炉の上にくぶら下がっている」として、「真鍮製のノブ」はペニスの上にある突起物、クリトリスである、とボナパルトは解釈している²⁸⁾。彼女にとってポオのテクストが反復していると見えるものは、同一のコンプレクス、同一の欲望である。これとは対照的にラカンはこの二つの場面に構造の反復、つまり三つの項の差異が織りなす関係の反復を見る。彼によれば、二つの場面それぞれの三つの項が三つの主体として支えている「三つの時間」(=三つの契機)は、「三つの注視」に順序を与える。この三つの時間は、ラカンのいわゆる「論理的時間」、知の段階を示すものであり、これら三つの時間が構成する関係構造は各主体の相互主観性によって支えられている。

最初の時間は何も見ないまなざしによって特徴が与えられます。これは<王>であり、また警察です。

第二の時間は最初の時間が何も見ないのを見て、その隠しているものが覆われているのを見ていると思ひ込むまなざしです。これは<女王>であり、また大臣です。

第三の時間は以上二つのまなざしによってそれらが横取りしようとする人間に対して隠すべきものをむき出しにしているのを見ているまなざしですが、これは大臣であり、最後にデュパンです。

目下のところわれわれの関心の対象となっているのは、主体が相互主観の反復の過程内でそれぞれに位置を移動させながらどのように結びついているかということなのです。

主体の位置の移動は、盗まれた手紙という純粋なシニフィアンが三すくみのなかでどのような場所を占めにくるかによって規定されるのをわれわれはやがて見るでしょう。そして、この点においてこそこの位置移動を反復強迫としてわれわれに確認させるものがあるのです。²⁹⁾

手紙という「純粋なシニフィアン」に対してどのような位置をとるか、それによって主体に形成される相互主観性も変化するわけだが、最初の時間における第一の視線は、実在論者のそれであり、「もの」への視線として物質界に視座を置く。例えばポオのテキストにおいて警視総監の眼は「探針と錐と拡大鏡」(46)とに並置されているが、これは自らの「行動原理」(46)の正しさを、物理世界に視座において証明しようとする自己充足的な視線であり、推理者とその相手との「知性の一致」(41)という意味での相互主観性に欠けているという点では、原場面の〈王〉と同様、何も見ていないことになる。第二の時間において視線は純粋な双数的・鏡像的關係にとらわれており、第一の時間の視線が何も見ていない限り、手紙は安泰だと思い込む。つまりこの視線は、あるいはこの時間はラカンが言う「想像界＝鏡像界」に属する。これに対して、第三の時間における視線は三者關係的な視座にあり、象徴界に属すると言える（このようにこの三つの契機は、ラカンの主体の発達段階とほぼ一致した形で進行するが、フロイトの性衝動理論における発達段階と同様に、共時的なものでもあるということは特筆すべきである³⁰⁾）。象徴的な視座ということ言えば（次に述べるようなことにラカンは触れていないが）、大臣とデュパンの両者が、件の手紙を奪取する際、自らが手紙を「取り出し＝産出し」、元の手紙とすりかえ＝置き換えているという事実にも注目しなくてはならない。つまり、言語的な構造をもつ無意識という場では、絶えずそうしたシニフィアンの置き換えが生じているということをポオのテキストが開示しているのである。手紙はまさに象徴的現実のなかに存しており、象徴的視座（第三項の位置）にあるもののみが、それを別の手紙と置き換えることができるわけである（ラカンにとって、現実界が到達不可能なものであるかぎり、シニフィエとはまた別のシニフィアンにすぎないのだ）。

こうして、原場面で第三の視線の位置を占めていた大臣は、第二の場面において双数的な關係に取り込まれて、デュパンにしてやられることになるわけだが、ラカンが特に強調しているのは、こうした關係構造の反復において主体にとって決定的な影響を与えるのが「シニフィアンの連鎖の自己主張」³¹⁾なのである、ということだ。ここでラカンのこのゼミナールが、「快感原則の

彼岸」という題のフロイトの論文についての注釈という体裁をとっていることを想起してみよう。フロイトはこの論文のなかで、「反復強迫」についての考察を行う。例えば、災害などで生命の危険にさらされた後に起こる「外傷性神経症」では、夢において当の外傷的な出来事が繰り返し再現される。有名な「糸車の遊戯」の事例においても、幼児は母親の不在を意味するものとしての「いない」fortを飽くことなく繰り返す。³²⁾ こうした反復強迫の事例は心的興奮量の低下を目指す快感原則の立場からは説明不可能である、と考えたフロイトは、「衝動の保守的な性質」³³⁾ を仮定、有機体に内在する衝動としての、無機物（生命のない状態）への復帰を目指す傾向としての「死の本能」を想定することになる。「快感原則の彼岸」には次のような記述がある。

精神分析が、神経症者の転移現象について明らかにするのとおなじものが、神経症的でない人の生活の中にも見出される。それは、彼らの身につきまとった宿命、彼らの体験におけるデモーニッシュな性格といった印象を与えるものである。かばって助けた人からやがてはかならず見捨てられて怒る慈善家たちがいる。彼らは他の点ではそれぞれちがうが、ひとしく忘恩の苦汁を味わうべく運命づけられているようである。どんな友人をもっても、裏切られて友情を失う男たち……また女性に対する恋愛関係が、みなおなじ経過をたどって、いつもおなじ結末に終わる愛人たち、等々。³⁴⁾

こうした例において反復しているのは、同一の欲求ではなく、何らかの構造であり、件のゼミナールにおいてラカンが目をつけるのは、まさに快感原則の彼岸にあるこうした反復において主体に構成的な作用を与えているのが象徴界の秩序、「シニフィアンの連鎖」である、という事実だ（「こうした反復は象徴的な反復であって、そこから当然、象徴の秩序はいまでは人間によって構成されるものとは考えられず、かえって人間を構成するものと考えられる、このことが考えられるのである」³⁵⁾）。ラカンは、彼の著作の随所で「死の欲動」と「象徴秩序」とを関連づけている。後者の構成要素としてのシニフィアンは（ヘーゲル的な意味での）「事物の死」という否定性をはらんでい
る限り、あるいは具体的な指示対象（あるいはシニフィエ）から乖離することで象徴的現実を構成する限り、主体の「生の諸限界」を超えて、その彼方へと反復・回帰・自己主張を繰り返すわけで、まさに「快感原則」の彼岸にある。また、象徴秩序は主体の誕生以前に存在する、この点で反復は「保守

的性質」と備えていると言える。つまりラカンにとって、「死の欲動は象徴秩序の仮面にすぎない」³⁶⁾。

ここでわれわれは、ラカンによる読解に関して、本論文の主題からすれば重要な局面を論ずることができる。「死の審級」³⁷⁾を具体的に表現するシニフィアンとしての手紙を問題にする限り、われわれも上に見た反復強迫に巻き込まれることは確実だ³⁸⁾、ということが言えるのだ。ラカンも指摘するように³⁹⁾、ポオのテキストでは手紙の内容は決して明かされないのであり、内容＝意味内容（シニフィエ）は不在のままなのだが、まさにこの意味の不在こそがシニフィアンとしての手紙に相互主観的關係構造の反復強迫を生成させるのだとしたら、潜在内容の探究をストップして「盗まれた手紙」というテキストを分析するラカンの読みも、D大臣の視線のように双数的関係に取り込まれる可能性があるのだ。実際、テキストに潜在的な＝隠された意味を読み取ろうとするボナパルトの読みは、第二場面の警察の視線に比較されうるし、顕在的な＝あらわにされたテキストを考察するラカンの読解はデュパンの視線に比較されうる。しかし、この反復に参入した以上、ラカンの読みも常に出し抜かれる危険にさらされるのである。デリダのラカン批判もこうしたことを念頭においているように見える。手紙の内容の不在を云々しながらも、実は不在そのものとしての「ファロス」という意味を手紙に与えている、というデリダによる批判⁴⁰⁾は、ラカンがシニフィアンをそれが表象するところのものに還元してしまう想像的・鏡像的視座にあることを示し、そうすることで自らをデュパンの位置に置こうとしているようにも解釈される。しかし、皮肉なことに、バーバラ・ジョンソンが指摘するように⁴¹⁾、「＜盗まれた手紙＞についてのゼミナール」のテキストには「ファロス」なる語は一度も見出されないのであって、その点でデリダも自らがラカンを追いやった位置に置かれることになる。今度はデリダの読みが反復強迫に巻き込まれていることが明らかになるわけである。そしてデュパンや大臣と同様に、ラカンは「ゼミナール」という手紙を、そしてデリダは「真実の配達人」という手紙をそれぞれ取り出し＝産出し、「盗まれた手紙」とすりかえたということになるわけである。

精神分析と文学

前章に見たラカンのポオ読解を前にして、われわれはふと頭をかしげたくなる。一体分析しているのはどちらなのか？精神分析なのか？文学なのか？

どちらが分析家の位置にあるのか？ラカン「快感原則の彼岸」という一筋縄ではではないテキストの注釈をするために「盗まれた手紙」というこれまた一筋縄ではではないテキストを読んだのだった。ここでは、「どちら」という語によって規定されるような一方向的な関係は成り立たないのではないか。「両者」が互いに読み合っている、そういう関係・絡み合いが現出しているのではないか。

フェルマンは、元来なされてきた「文学と精神分析」Literature and Psychoanalysis という表現に含まれる and の虚偽性を指摘する⁴²⁾。彼女によれば、この and は本来の対等関係を表すものではなく、むしろ従属関係を表しているというのである。「知識体」・「主体」・「主人」としての「精神分析」に、「言語体」・「客体」・「奴隷」としての「文学」が従属する、という関係。「文学と精神分析」という表現にはつねにこうしたヒエラルキーが前提されてきた、という。「＜盗まれた手紙＞についてのゼミナール」にまつわる問題圏において、われわれはこうしたヒエラルキーの解体を見ているのだ。

実際、「精神分析は文学について多くのこと、あるいはあらゆることを教えるのに、文学が精神分析に関して教えることはほとんどない、あるいはまったくなく⁴³⁾と普通考えられているようだ。しかし、フロイトの「快感原則の彼岸」というテキストが、「盗まれた手紙」というテキストによって具体的な表現を与えられている、あるいは「盗まれた手紙」というテキストから何らかの知の供給を受けている、とはいうことは否定できない。精神分析が「知っている」と想定される主体」という格位を占有することは不可能となり、まさに精神分析は文学によって分析されることになるのである。

「応用」application。フェルマンは文学と精神分析との相補的關係を考えるにあたって、これを「内包」implicationに替えることを提案する。精神分析はその発展の道程において常に文学を参照してきたわけで(オイディプス、ナルキッソスといった「固有名詞」がそれを端的に示す)、「文学は精神分析が自らを表現するために使う言語なのである」。ここにおいて、「外部的な関係」を前提とする「応用」という用語は文学と精神分析との関係を示す場合には当を得なくなり、「内的な空間関係」を指示する「内包」implication (Latin: im-plicare = in + fold) という語が適当であるのだ、というのが彼女の指摘である。「文学と精神分析の間には、両者を明確に定義し区別する自然な境界などない」。文学と精神分析とは互いに相手のなかに存する他者としてあり、互いが「相手の無意識」なのだという。⁴⁴⁾

そうした内包的な絡み合いの場で文学と精神分析とは、互いを読むとき、

各々の自己同一性を維持することは不可能となり、己をどこかで変ずることになる。われわれの観点でも、「基本科学」であると思われていた精神分析は、文学を読むことで「応用精神分析」の機能を果たさなくなる。ラカンの分析において、ポオのテキストは自らの反復を精神分析あるいはフロイトの「快感原則の彼岸」というテキストのなかに読んでいるのであり、だからこそ、ラカン・デリダの読みは「盗まれた手紙」の構造を反復せざるをえないのである。もはや、基本科学は「文学」に自らを一方向的に導入することは不可能であるのだし、自らをそのままの姿で見出すことなどできないのである。ただ、精神分析が文学を読むとき、すでにして文学も精神分析を読んでいる、このことが言えるだけである。逆説的なことに、こうしたかたちで、「自己批判的潜在能力」がその効果を発揮しているとわかるわけだ。

われわれにとってはこの読解の場に積極的に参入することが急務となる。その「作業」は、具体的には文学による精神分析の読み直しということになるかもしれない。精神分析が文学の中にコンテクストを読むのと同様に、文学も精神分析の中にコンテクストを読むということもありうるのだから。

最後に、フロイトの次の言葉に注目してこの論考にひとまずは区切りを付けたいと思う。

……ご承知のように私は、われわれの心的機構は層的な過程によって生ずる、という仮説に取り組んでいます。記憶痕跡のかたちをとって存在している諸素材は、新たな条件に対応して繰り返し再体制化をこうむり、再記入されるのです。(強調フロイト、1896年12月6日付フリース宛書簡)⁴⁵⁾

われわれの読み直しという作業Arbeitは、つまり事後的なnachträglich読解は、今後の文学テキストの読解という「新たな条件」によって精神分析を「再体制化」・「再記入」することでもある。そこで見出されるものはこれまでわれわれが出会ってきた精神分析の側面とは異質のものであるかもしれない。まさにこうした読解のなかでこそ、精神分析は「自己批判的潜在能力」を機能させていると言えるし、「フロイトへの回帰」というテーゼはこの方向で再考されなくてはならないのではないだろうか。フロイトの理論の変遷、あの一筋縄ではいかない無形性、それはあらゆる(広い意味での)読解の結果であり、その変遷を継承するとはまさにフロイトのテキストをクリティカルに

読むこと、さらにそうした視点から「文学と精神分析」という問題を捉え直すこと、それ以外にないのではないか。

NOTES

- 1) ジャン・ベルマン＝ノエル『精神分析と文学』（石木隆治訳、白水社、1990年）、p.22。
- 2) *Ibid.*, pp.22-3。
- 3) Joseph Wood Krutch, *Edgar Allan Poe: A Study in Genius* (New York: Knopf, 1926), p.210.
- 4) Shoshana Felman, *Jacques Lacan and the Adventure of Insight : Psychoanalysis in Contemporary Culture* (Cambridge, Massachusetts and London: Harvard University Press, 1987), p.35.
- 5) Marie Bonaparte, *The Life and Works of Edgar Allan Poe: A Psycho-Analytic Interpretation*, trans. John Rodker (London: Imago Publishing CO. LTD., 1949), p. 643.
- 6) *Ibid.*, p.662.
- 7) 『フロイト著作集3』（人文書院、1993年）、p.84.
- 8) *Ibid.*, p.88.
- 9) ボナパルトは文学テキストの形成途上において「夢の作業」と同質の作業が行なわれることを具体的に検証する点では「詩人と空想すること」を超えていると言えるが、やはり「精神分析と文学」という問題圏においては決定的なところでフロイトの件のテキストに全面的に依拠している。これはボナパルトが「詩人と空想すること」以外のテキストにまったく触れていないということではなく（もちろん彼女はフロイトの他のテキストにも言及している）、この問題圏では「詩人と空想すること」の枠組みが支配的に彼女の読解行為に関与している、ということである。
- 10) Bonaparte, pp. 642-3, 648-9.
- 11) ジャック・デリダ「真理の配達人」清水正・豊崎光一訳『現代思想臨時増刊号 デリダ読本』（青土社、1982年）、p.59.
- 12) Elizabeth Wright, *Psychoanalytic Criticism: Theory in Practice* (London and New York: Methuen, 1984), p.41.
- 13) Hervey Allen, *Israfel* (London: Brentano's, 1927).
- 14) Bonaparte, p.209.
- 15) 『フロイト著作集3』所収。ちなみにボナパルトはこの論文をフランス語に翻訳している。
- 16) Bonaparte, p.680.
- 17) Felman, p.35.

- 18) パメラ・タイトル、『ラカンと文学批評』（市村卓彦・荻本芳信訳、せりか書房、1987年）、pp.115-6.（「ポー」を「ポオ」に変更）
- 19) Felman, *op. cit.*.
- 20) Wright, pp.44-6.
- 21) ボナパルトの件の著作に付されたフロイトによる序文（xi頁）を見てみよう。

序文

この本において、私の友人かつ教え子であるマリー・ボナパルトは、病的な傾向をもつ一人の偉大な作家の生涯と作品に精神分析的な光をあてた。

彼女の解釈的な努力のおかげで、いまやわれわれはポオの作品のもつ多くの特徴が彼の性格によって条件付けられていたことが分かり、彼の性格の起源が強い情緒的な固着と幼児期の苦痛な体験の数々とにあったということを理解することができる。このような研究は創造的才能を説明するとは主張してはいないが、そうした才能を目覚めさせる要因とそうした才能が選ぶように運命づけられる主題の種類を明らかにする。非凡な才能を付与された人物（個人）の精神を支配する法則の研究としては類いまれなものである。

S・フロイト

はからずもフロイトはこの序文のなかでボナパルトの方法の限界を明らかにしている。つまり、彼女の伝記的アプローチでは個人としての作者の無意識の解明が最終的な到達点なのであり、「創造的才能」（“creative genius”：これは詩学的関心の対象領域に属するのではないか）の説明はその研究の埒外にあるのだ。彼女が向き合うのは作者＝患者としてのポオなのであり、彼女が書くのは人物ポオなのである。こうした研究で「創造的才能」とともにテキストそのものがどこか周辺的な位置に置かれても不思議はないだろう。

また、この序文は「詩人と空想すること」とボナパルトの著作との間にある、文学的効果に対する態度の決定的な相違点をも物語っているのである。

- 22) ヘイドン・ホワイトの次の著書を参照のこと。Hayden White, *Tropics of Discourse: Essays in Cultural Criticism* (Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1978).
- 23) ジャック・ラカン、「リチュラテール」若森栄樹訳『ユリイカ1986年12月号』（青土社刊）、p.92.（「ポー」を「ポオ」に変更）
- 24) ラカン、『エクリIII』（佐々木孝次他訳、弘文堂、1984年）、p.396.
- 25) ラカンのいう「シニフィアン」とフロイトのいう「表象」Vorstellungとは、前者がその指示対象との結びつきを重視しないのに対して、後者はその指示対象との結びつきを条件とするという点で区別されうるが、フロイトはこうも述べている。「現実からの解離が条件となって、表象はいきいきとした活気を与えられる」（『著作集6』、p.16）。

さらに「否定」という論文において主／客問題を扱うさいには、こう述べている。「表象における知覚の再生は、かならずしもその知覚に忠実な反復とはかぎらない。……そういう場合現実吟味は、この歪曲がその程度におよんでいるかを見きわめなければならない。しかし、われわれは、現実吟味をするさいの条件は、かつて現実の満足をもたらした客体がなくなってしまうことだと考えるのである」(『著作集3』、p.360)。フロイトのこうした考え方は、例えばラカンの次のような多分にヘーゲル的な見解にかなり深く関与している。「このように象徴は、まず第一に事物の殺害として現われ、この死が主体のなかに彼の欲望の永遠化を構成する」。See *Ecrits: A Selection*, trans. Alan Sheridan (New York: Norton, 1977), p.104.

- 26) ポオのテキストは、次のものを使用。James A. Harrison, ed. *The Complete Works of Edgar Allan Poe*, vol. VI (New York: AMS Press Inc., 1965). なお引用の際は(頁数)で示す。
- 27) Felman, p.44.
- 28) Bonaparte, p.483.
- 29) ラカン、『エクリ I』、pp.13-4. (「意味表現」を「シニフィアン」に変更)
- 30) 実際デュパンが自らの結論を確実にする条件として警察からの情報とD大臣との同一視“Identification”を必要としているのと同様に、第三の時間は他の二つの時間と解きがたく絡み合っている。それは現実界・想像界・象徴界という形をとっても同様である。
- 31) ラカン、*op.cit.*, p.11. (「記号表現」を「シニフィアン」に変更)
- 32) 『フロイト著作集6』、pp. 154-7.
- 33) *Ibid.*, p. 174.
- 34) *Ibid.*, pp. 161-2.
- 35) ラカン、『エクリ I』、pp.54-5.
- 36) Jacques Lacan, *Seminar : The Ego in Freud's Theory and in the Technique of Psychoanalysis*, trans. Sylvana Tomaselli (New York: Norton, 1988), p.326. また、『エクリ III』、pp.310-1も参照のこと。
- 37) 『エクリ I』、p.24.
- 38) 『エクリ』には次の記述がある。「デュパンがいつ自分で手紙の象徴的回路から身を引かなければならないのか、これはおそらくわれわれに関係したことであると考えるのは実際に当然のことではないでしょうか—われわれもまた、少なくとも一時転移の過程でわれわれのなかに保管される手紙に対してその密偵となるのですから」(*Ibid.*, p. 41)。
- 39) *Ibid.*, pp.28-9.
- 40) デリダ、*op.cit.*.
- 41) Barbara Johnson, *The Critical Difference: Essays in the Contemporary Rhetoric of Reading* (Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1980), p. 116.

- 42) Shoshana Felman, "To Open the Question." *Literature and Psychoanalysis: The Question of Reading: Otherwise*, ed. Shoshana Felman (Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1982), p.5.
- 43) *Ibid.*, p.7.
- 44) *Ibid.*, pp.8-10.
- 45) James Strachey, trans. The Standard Edition of *The Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, vol. I (London: The Hogarth Press), p.233.